

ミャンマーのアマラワディー僧院に高等学校を設立

第一コンサルタント 右城 猛

1. まえがき

2019年3月7日から11日まで4泊5日の日程でミャンマー連邦共和国を訪問し、高知丸高と第一コンサルタントが共同で建設するアマラワディー僧院高等学校の校舎をヤンゴンの建築会社と契約すると共に、起工式を執り行ってきた。

2. ミャンマーの概要

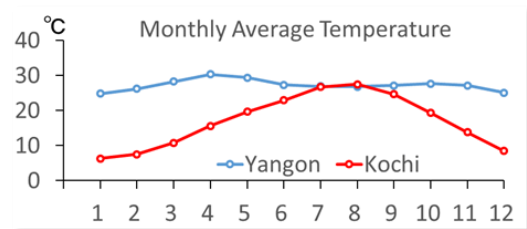
ミャンマーは、タイの西側に位置し、南はベンガル湾に面している。国土面積は日本の1.8倍あり、5,225万人がすんでいる。国民の70%はビルマ族が占め、人口の90%は仏教徒である。

以前はビルマ連邦社会共和国と呼ばれていたが、1989年にミャンマー連邦共和国に国名が変更されている。日本ではミャンマーと呼んでいるが、民主的な手続きを経ていない軍事政権が変えた国名は認めないという国もあるようである。

首都は2006年にヤンゴン(旧名称はラングーン)からネピドーに移っている。これは軍事政権が群衆の反乱から逃れるためと言われている。



ミャンマーの地図



ヤンゴンの気温



ミャンマーの位置

ミャンマーは常夏の国で、ミャンマーの気温は年中30度前後である。

ミャンマーの一人当たりの名目GDPは1,220ドルと少ない。ASEAN(東南アジア諸国連合)諸国の中ではカンボジアと並び最低水準にある。

ミャンマーの経済発展が遅れた原因は、軍事政権に対して国際的な非難があり、経済封鎖が続いたためである。この時代に学校教育も軽視されたため、教師になる人材も育てていない。

しかし、昔から日本の寺子屋に相当する僧院学校があったことから、ミャンマー語の識字率は90%と高い。小学生から英語教育もされている。イギリスの植民地時代があったためである。

ミャンマーが親日的であるのは、歴史的背景がある。ビルマ時代の独立運動家で「ビルマ建国の父」として国民から敬愛されているアウンサン将軍は、日本軍に独立戦争のための軍事訓練を受けている。そして、戦後から 80 年代まで政府の主要な役職を歴任していたのは、日本の士官学校卒のエリートたちであった。

1970 年～80 年代の軍政時代の留学先は西ドイツと日本のみであったため、現在の政府高官や大学幹部には日本政府の国費外国人留学生が多い。

ミャンマー民主化運動の指導者で、国家顧問として実質的な国家指導者の地位にあるアウンサンスーチーも、1985 年に約 9 ヶ月間、国際交流基金の支援で京都大学の客員研究員として来日し、父アウンサン将軍についての歴史研究をしている。

西側諸国が経済制裁を課している中であって日本は、地道に援助を続けてきたことからミャンマーと貴重な人的ネットワークを築いている。

3. 羽田エクセルホテル阪急

ミャンマーへは成田から 8 日の 11 時 45 分発の便に乗るには、高知からは朝一番の飛行機でも間に合わない。羽田第 2 ターミナルにある羽田エクセルホテル東急に前泊した。

旅行のメンバーは、第一コンサルタンツからは私と妻の絹枝、須内寿男技師長。高知丸高からは高野広茂会長、高野いくよ常務、高野鈴さん、高野朝日さんの 7 名である。鈴さん、朝日さんは高校三年生。来年度から大学生になる。



羽田エクセルホテル東急のレストランで夕食

4. 成田国際空港からバンコクへ

8 日、羽田空港 7 時 50 分発のリムジンバスで成田国際空港へ。

成田空港を利用するのは 2012 年 9 月以来。様変わりしていた。最も驚いたのは、出国審査が無人になっていること。カメラでパスポートと顔を認識し AI で本人か確認している。AI の時代が到来したことを実感させられた。

飛行機は成田 11 時 45 分発の NH5955 便。運航会社はタイ国際航空。バンコク到着は現地時間の 17 時 05 分(日本時間 19 時 05 分)、フライト時間は 7 時間 20 分。成田からヤンゴンへ直通便が出ているが、満席で予約できなかった。

私たち夫婦と高野夫婦はビジネスクラスであった。家内は 2 年前に、いくよ常務は半年前にそれぞれ癌の手術をしている。疲労すると免疫力が落ちることを心配して高野会長がビジネスを予約してくれていた。

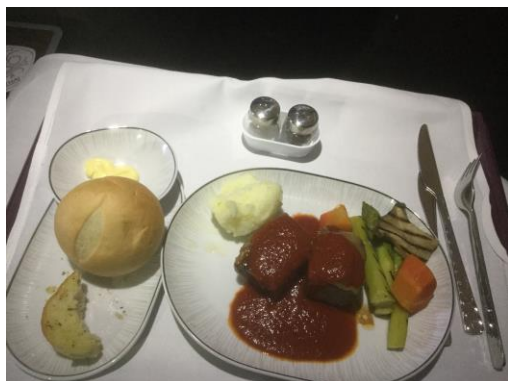
1993 年に、お付き合いのある会社から招待を受けてイタリアに行った。そのときに初めてビジネスクラスに乗った。世界的に著名な建築家の宮脇壇先生も一緒であった。先生がビジネスとエコノミーでは「天国と地獄」と言われたことを思い出した。座席が広々としている。足を伸ばして寝ることもできる。パソコンで仕事をするにも十分な広さがある。機内食も豪華である。私は昼食のときに洋食を選んだが、前菜、メイン料理、デザートと出てきた。



和食の昼食を食べる家内



私は洋食。前菜はサーモン



二番目のメイン料理はビーフ。柔らかくて美味しかった。



デザート

5. バンコクからヤンゴンへ

バンコクのスワンナプーム国際空港からは 18 時 5 分発のタイ国際航空 TG0305 便。フライト時間は 1 時間 15 分。時差は 30 分。座席はビジネス。

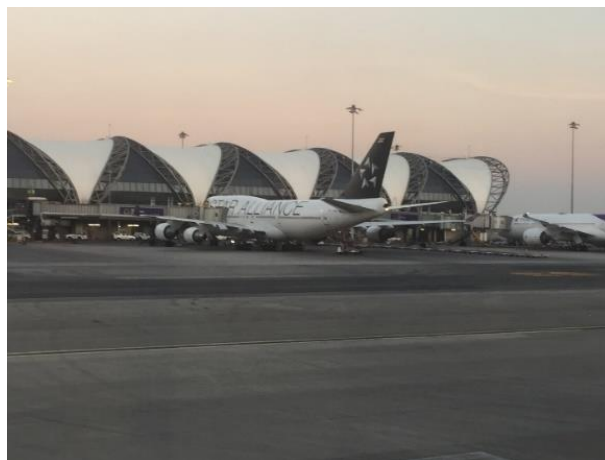
トランジットまでの余裕は 1 時間であったが、飛行機が遅れたため 30 分しかなかった。

搭乗口 42A の位置は確認できたが、トランジットの場所がわからない。何度もうろうろして何とか間に合った。入り口が分かりにくかった。

スワンナプーム国際空港の敷地面積は、成田国際空港の 3 倍もある。世界最大級の国際空港であ

る。タイ国際航空の機内誌を見ると、この空港から日本へは羽田、成田、関西、中部、新千歳、福岡へ飛んでいる。中国には北京、上海、広州、成都、昆明へ飛んでいる。その他にアジアの 26 都市、中東の 2 都市、オセアニアの 5 都市、ヨーロッパの 17 都市へ飛んでいる。

航空会社は、タイ国際航空以外に 83 社が運航している。すごい東南アジアのハブ空港である。それでもまだターミナルビルの拡張工事が行われていた。タイ国の成長の勢いを感じた。



バンコクのスワンナプーム国際空港

6. ヤンゴン到着

ヤンゴン国際空港到着予定は 18 時 50 分であったが、30 分以上遅れて到着した。

機内は冷房が効いて寒かったが外に出ると、熱帯地方独特のムツとした暑さを感じた。

空港には、通訳と観光案内をしてくれるハン 2 ハン・ミャンマー株式会社のハン・リン・アウンさん、今年の 4 月から高知丸高に就職することが内定しているスモー・ハンさんが迎えに来てくれていた。

スモーさんは、マンダレー外国語大学日本語学部卒で岡山大学に 1 年間留学した経験があり、日本語をととても流暢に話される。

ホテルはセドナホテル。1944 年開業の 11 階建てエスニック建築様式の五つ星ホテル。料理が美味しいことで有名。日本人の宿泊客も多かった。

明日、ここで結婚式が挙げられるようである。その準備がされていた。

ホテルに着くなりホテル内の中華レストランで食事をした。既にチェックインされていた京都大学の木村亮先生にも同席していただいた。先生は高知丸高の顧問をされている。



木村亮先生を囲み、ハンさん、スモーさんも一緒に食事。



写真左より右城絹枝、高野いくよさん、高野鈴さん



写真左より高野朝日さん、ハンさん、スモーさん。

7. アマラワディー僧院学校

ヤンゴン郊外のミンガラドン郡区にアマラワディー僧院がある。ヤンゴン市中心部から北へ自動車で45分の距離である。

アマラワディー僧院の中には小学校と中学校がある。小学校5学年、中学校4学年合わせて650名が勉強している。



アマラワディー僧院の入り口

この日は土曜日であった。生憎の休校であったため授業風景を見ることはできなかった。

ミャンマーには公立学校がある。授業料や教科書は無料であるが、制服や文房具、学校の備品などの教育関連の費用は生徒が負担しなければならない。貧困家庭でそれができない子供達を無償で教育しているのが、僧院学校(寺子屋)である。お坊さんが運営する学校であり、政府からの補助や寄付金、ボランティアに助けられて成り立っている。2016年のジェトロのBOP層実態調査レポートによると、小中高合わせて全国に1,531校あり、294万人が学んでいる。その中に高等学校はわずかに2校しかない。



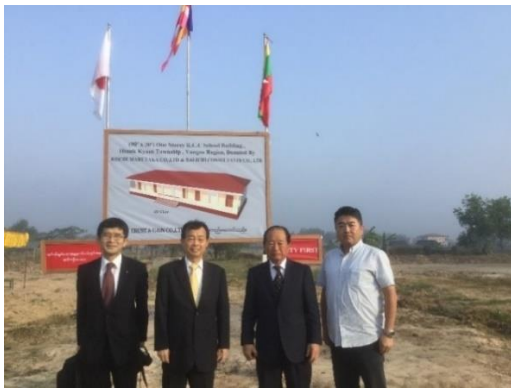
アマラワディー僧院内にある小学校



アマラワディー僧院内にある小学校。



現在は、礼拝堂がある僧院ホールでも授業をしている。



建設予定の高校の看板の前で記念撮影

8. 建設する高等学校の概要

昨年の8月に高野会長がアマラワディー僧院を訪問したとき、中学生に、「高校ができれば進学したいですか」と尋ねると、全員が目を輝かせて手を挙げた。その姿に感銘を受け、校舎を建設して僧院へ寄贈することを決意したそうである。

建設場所は、アマラワディー僧院の敷地内である。ここに4教室ある平屋建ての校舎を建設する。4つの教室のうち、3教室は高等学校の教室として利用する。ミャンマーの高等学校は2学年制であったが2017年の1年生から3学年制になっている。

残りの1教室は、日本で働くことを希望している高校生や大学生などに日本語やパソコンなどを教える特別教室であり、10台のパソコン、空調設備などを備えることにしている。

9. 高等学校の起工式と建築会社と契約の締結

3月9日8時15分より礼拝堂がある僧院ホールで僧院長バツダンタ・イエワタ僧の説教を聞いた後、寄付者を代表して高野会長が挨拶をされた。

その後、外に出て、校舎を建てる場所に木製のハンマーで木杭を打ち込む儀式を行った。地鎮祭に相当する。木杭を打ち込んだのは建築関係者7名で、日本人は、高野会長と私の二人であった。

地鎮祭では、ミャンマーと日本の国旗、それに僧院の旗が掲げられ、僧院学校の生徒や関係者が参列して盛大に行われた。



博士(Ph.D.)の称号を持つ僧院長バツダンタ・イエワタ僧の説教



説教を聞く関係者や生徒たち



寄付者を代表して高野会長の挨拶



国旗や僧院の旗を掲げて地鎮祭



地鎮祭を見つめる生徒



生徒たちが見守る中で地鎮祭



地鎮祭の最後に記念撮影



木杭を打ち込む高野会長



木杭を打ち込む筆者



地面に打ち込んだ木杭

地鎮祭の儀式の後、再び僧院ホール礼拝堂に戻り高野会長が寄付者のスピーチ。当初の予定にはなかったが、高野会長の指名により建築を請負うトラスド・アンド・ゲイン社のチー・トン社長も挨拶をされた。

続いて私が寄付者の挨拶をした。羽田から成田に移動するリムジンバスの車中で書いた原稿を事前にスモーさんに渡し、通訳してもらった。

ミンガラバー(こんにちは)、トェヤダワンタバデ(はじめまして)。私は第一コンサルタンツの社長をしています右城猛と申します。この度は、ミャンマーのたくさんの方々のご協力をいただき、高校の起工式ができますことに心より感謝申し上げます。

私はミャンマーに、はじめてきました。皆さんにお会いできて、とても嬉しく思っています。

第一コンサルタンツは、今から 55 年前にできた会社です。社員は 130 名います。道路や橋、トンネル、公園など社会インフラストラクチャーの設計をするのが私たちの仕事です。

ミャンマーの子供たちは、大変優秀で、勉強することを強く望んでいると聞いています。これか

ら作る学校は、そのような皆さんの期待にきっと
応えられることと思います。

私は高校を作り、教育を支援するだけでなく、
卒業後も協力したいと考えています。ヤンゴン工
科大学あるいはマンダレー工科大学に進学し、そ
こで土木工学を学び、日本の私の会社で働くこと
を希望する人がいれば、経済的な支援をさせてい
たいただきます。

私は、ミャンマーの人たちと一緒に仕事ができ
る日が来ることを楽しみにしています。

どうか、これから、よろしくお願ひします。

チェーズバー(ありがとう)

私の挨拶に続いて、ミンガラドン群区チョ・セ
ントン教育長の挨拶があった。

ハンさん、トラストさんが着ているのはミャン
マーの「エンジー」(上着)と「ロンジー」(スカ
ート)で、ミャンマーの正装。

その後、高野会長と私から僧院長に記念品を贈
呈させていただいた。

日本側から招待客に土産品を贈呈、生徒には野
村煎豆のミレービスケットを配布した。



ミンガラドン群区チョ・セントン教育長挨拶



高知の土産物を僧院長に贈呈



僧院長から返礼の品を受け取る



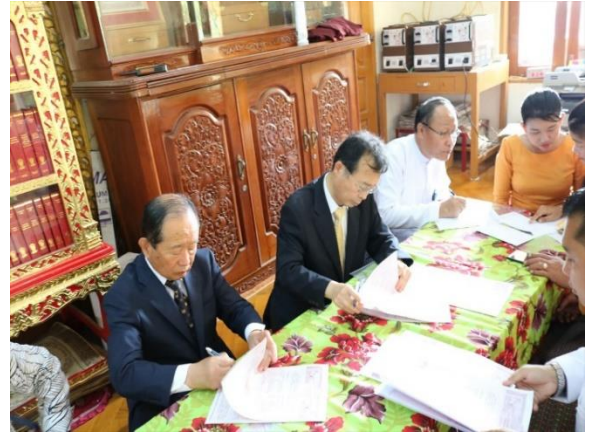
建築を請負うトラスト・アンド・ゲイン社のチー・トン社長の挨拶



寄付者の私の挨拶。通訳はスモーさん。



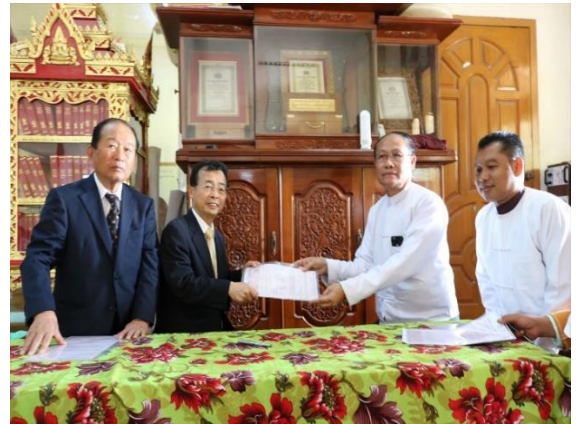
関係者に高知からの土産を贈呈



建築契約書に調印する高野会長と筆者



野村の「ミレービスケット」を生徒に配る高野会長と筆者



契約書を交換



プレゼントの最後に記念撮影

会食の準備中に高知丸高、第一コンサルタンツ、トラス・アンド・ゲイン社の3社で校舎建築の契約書を取り交わした。

その後、退場する生徒たちに現地で製造したパンとジュースをプレゼントさせていただいた。パンの味は日本と同じで美味しかった。

最後に僧侶が料理してくれたミャンマー料理で会食。

起工式は国会議員や教育長ら招待客 48 名と生徒 150 名が出席し、盛大に執り行われた。



参加した生徒にジュースとパンをプレゼント



親元を離れ集団生活をしながら僧侶になる修行を続ける子供たち。



僧侶が料理したミャンマー料理をご馳走になった



デザートを食べながらアッシンレーワタ僧と歓談

10. 農園の視察

アマラワディー僧院からさらに北へ自動車です1時間の距離に、僧院長の知り合いが所有している24ヘクタールの土地があり、売ることができるので見に行くことになった。

しばらくは舗装をした2車線道路であったが、途中からは自動車の車輪が通る所だけ舗装された道路、未舗装のデコボコ道になった。未舗装の道路では車体が左右に大きく揺れた。自動車の底が地面に支えて動けなくなる場所もあった。車酔いする家内には相当堪えたようであった。

沿道には、みすばらしいワラ葺きやトタン葺きの高床式小屋があった。電気も水道もないが、人が住んでいる証拠に洗濯物が干してあった。

1時間のはずが2時間半かけてようやく目的地に着いた。そこには、沿道で見た小屋とは桁違いに立派な2階建ての民家があった。大地主で、この辺りでは金持ちの部類に入るのであろう。

家の横には高いやぐらがあり、その上に水槽のようなものが置かれていた。雨水を溜めて飲料水に利用しているように思えた。

トイレを借りるため家の中に入れてもらった。風呂場や炊事場、居間を見せてもらったが、ここにはとても私は住めないと思った。

家の横にはジャックフルーツの実がなった木があった。蟻塚もたくさん見られた。



自動車の車輪が通る所だけ舗装された道路



トタン屋根の見すばらしい民家



目的地の地主の家



地主の家のトイレ



風呂場



炊事場



居間



蟻塚があちこちに見られた



ここの家の子供

11. セドナホテルの鉄板焼き

9日の夜は、セドナホテルの中にある鉄板焼きの店で食事をした。肉だけでなく、サーモンやマグロの刺身、にぎり寿司もあり、新鮮で美味しかった。高野会長が絶賛していただけのことはある。

食事には、トータルマスターズ株式会社に相談役をされている井之川四郎氏と安藤・間のミャンマー営業所長をしている岡本親典氏も招待していた。井之川氏は、元・水谷建設の勤務時代に東南アジア駐在20年で、J-シンク・ミャンマー会社を設立し、現地で重機オペレータを養成しているとのことであった。



やはり日本食が最高



車酔いしていた家内も日本食ですっかり元気を取り戻した

12. シュエダゴン・パゴダ

10日、高野会長と木村先生はスモーさんの案内で、マンダレー港に計画されている栈橋工事の現地調査に行かれた。残った6名は、ハンさんの案内でヤンゴン市内を観光した。

ヤンゴンは、ミャンマーの旧首都で、ヤンゴン管区の州都。旧名称はラングーン。ネット情報では1989年にヤンゴンに改名されたとなっているが、iPadの地図ではなぜか市内はヤンゴン、郊外はラングーンと表示された。人口は521万人(2014年)で、ミャンマー最大の都市である。

2006年より、首都はネピドーに移っている。

ヤンゴンの中心の丘の上に建っている黄金の寺院が、シュエダゴン・パゴダ。ミャンマー人にとって最も神聖な仏教寺院である。国内外からたくさんのお客が訪れている。



寺院内は裸足。エレベータでシュエダゴン・パゴダに上る。



日向は日差しがきつい



高さ100mの中央の仏塔は、修復工事中であった。

ミャンマーには伝統的なビルマ暦がある。1週間が8曜日に分かれている。水曜日が午前と午後に分かれて8曜日になっている。各曜日には守護動物と星が存在していて、塔の周りを囲んで曜日ごとの守護動物が祭られている。自分の生まれた曜日の守護動物に、自分の歳の数だけコップにすくった水をかけてお参りをする慣わしがある。

歳の数だけ水かけをしていると時間がかかり過ぎるので3回に留めた。

パゴダ(仏塔)には、ダイヤモンド5451個、ルビー1383個など合計7000粒近い宝石もちりばめられている。パゴダ頂上には76カラットのダイヤモンドがある。



朝日さんは水曜日午前生まれ。方角は南で水星。守護動物は牙のあるゾウ。性格は、短期、議論好き、自由主義。



家内は金曜日生まれ。方角は北で金星。守護動物はモグラ。性格は、わがままで話し好き。



私は月曜日生まれ。方角は東で月。守護動物はトラ。偶然に干支も寅。性格は、嫉妬深い、平和主義で気が優しい。



鈴さんは火曜日生まれ。方角は南東で火星。守護動物はライオン。性格は、正直で情熱的な道徳家。



パゴダ頂上の 76 カラットのダイヤモンド

13. チャウッターヂー・パゴダ

ショッピングや昼食を済ませて最後に観光したのは、寝釈迦仏で有名なチャウッターヂー・パゴダ。

優美に横たわる寝釈迦仏は、全長 70m、高さ 17m。ミャンマー国内でも屈指の大きさである。足裏には 108 の仏教宇宙観図が描かれている。



優美に横たわる寝釈迦仏



足裏には 108 の仏教宇宙観図

14. ヤンゴンのショッピングセンター

ミャンマーに来て驚いたことは、ヤンゴン市内と郊外の経済的格差の大きさであった。

メモリーライターを買うため、宿泊していたホテルの近くのスーパーマーケット「ミャンマープラザ」に立ち寄った。売っている品物や価格は日本のスーパーマーケットと変わらない。

昼食を取るのを兼ねて立ち寄った「ジャンクション・シティ」は、日本の大都市にあるような近代的なショッピングモールであった。2017年3月にオープンしたようである。モールの中は若者たちで溢れていた。

ビルの中には、博多ラーメンの「一風堂」、和風料理店「日本料理 Fuji」もあった。日本料理 Fuji でカツ丼を食べたが、価格は日本と同じ 650 円であった。

昨日、ヤンゴン郊外で見た田舎の光景とのあまりの違いに驚いた。田舎の生活水準は、日本の 1950 年代頃だろう。それに対してヤンゴン市内は現在の日本と変わらない。ヤンゴン市内に比べて田舎は 70 年くらい遅れていると感じた。

観光客が土産物を買う場所として有名なヤンゴン最大の商業施設「ボージョーアウンサンマーケット」にも立ち寄った。ジャンクション・シティと道路を隔てたところにあった。ここは 1926 年建造で、通称「ボージョー・マーケット」と呼ばれている。ミャンマー産の宝石を売る店舗が多く並んでいた。



ミャンマープラザ



若者で溢れるジャンクション・シティ

16. 高知放送で放映

3月19日に高知丸高へ RKC 高知放送報道制作部の西山俊裕主任と高知新聞社の井上智仁記者が来られ、お二人から取材を受けた。

取材を受けたのは高知丸高の高野会長、陳さん、第一コンサルタンツの私と須内技師長の4名。

高知丸高と第一コンサルタンツがどのような経緯があってミャンマーへ高校を設立することになったのか、高校を設立する目的は何か、校舎の規模と生徒の規模はどの程度か、どのような人材を育成するのか、開校はいつからか、といった内容の質問があった。

取材の内容は、当日の11時30分からと夕方の6時15分からのニュース番組で放送された。

高知新聞への掲載日は未定である。





17. あとがき

昨年の9月、高知丸高の高野広茂会長から、「ミャンマーに高等学校を作りたいと思っている。右城社長に協力してもえないだろうか」と相談を受けた。その場で間髪入れずに、「会長、一緒にやりましょう。第一コンサルタンツが費用の半分は出します」と回答させていただいた。

第一コンサルタンツでは、愛媛大学の矢田部龍一教授がネパールの防災教育に力を入れていたので、それに協力させてもらっていた。

京都大学の木村亮教授が代表を務める NPO 法人「道普請人」では、開発途上国の若者たちに、

土のうを用いた道づくりの技術を指導している。その考え方に共鳴し、道普請人の会員に加入し協力させてもらっている。

旅行先のネパールやカンボジア、ベトナムなどの開発途上国で貧しい子供たちを見るたびに、何らかの形でこの子供たちの力になれることはないだろうかと常々思っていた。

高野会長からのお誘いは、偶然ではなく必然であったような気がしている。

ミャンマーに行っているときに、義理の叔父が他界した。霊前に挨拶しようと帰国後に叔母を尋ねると、同居している従姉妹が、「たけっちゃん、このノートをミャンマーの子供たちにあげて」と、ノートが詰まった段ボール箱2箱を渡された。

ネパールの知人に送る予定で買っていたが、2015年のネパール・ゴルカ地震で一家が亡くなったので、そのままにしていたというのである。

振り返って見ると、不思議な運命の糸で操られているような気がする。子供たちのために学校を作るのは、私に課せられた使命かも知れない。

参考文献

- (1) ビルマ / ミャンマー・世界史の窓、
<https://www.y-history.net/appendix/wh0802-053.html>
- (2) JETRO: 教育事情 ミャンマーBOP 層実態調査レポート、2016年1月
- (3) 西垣充: ミャンマー人材 実践ガイドブック、日本実業出版、2018.1
- (4) 天内和人、北村健太郎: ミャンマーにおける技術者高等教育の現状と課題、徳山工業高等専門学校研究紀要、2015年、No.39
- (5) 上別府 隆男: ミャンマーにおける人材需要と高等教育改革、都市経営、2018年、No.10, pp15-25

2019年3月23日